



阪神電気鉄道120周年

阪神電鉄が1905年4月12日、神戸(三宮)ー大阪(出入橋)間から鉄道営業を開始して以来、今年で120周年を迎える。神戸市には開業時から14の駅を設置し、六甲山の開発を先導するなどしてきた。シリーズ最終回は、建築家の安藤忠雄さんと久元喜造・神戸市長に、同電鉄との関わりやまちづくりについて聞いた。

まちと一体、生活に密着

第4回 (4回続きシリーズ)



三宮の地にあった「神戸駅」より南に1912年開業した「薄道停留場」(同年11月)



建築家 安藤 忠雄 さん

「安藤さんにとって神戸とはどんなまちか。神戸は駆け出しの頃から多くの仕事を手がけた思い出のあるまちだ。1960年代に三宮地下街の仕事に関わり、70年代以降は北野町の「ロースガーデン」「北野アレイ」などの商業ビル、灘区の「六甲の集合住宅」も設計した。阪神・淡路大震災が発生した日、私は仕事でロンドンにいた。予定を全てキャンセルして帰国し、変わり果てた神戸を見て衝撃を受けた。当時は「もう元には戻らないのでは」と思ったものだ。今改めて、よくここまで復興できたと感じる。「このまちに住み

鳴尾付近にも球場の歓声

「開業120周年を迎える阪神電鉄との関わりは。若い頃、阪神鳴尾駅(現鳴尾・武庫川女子大前駅)の近くに住んでいた。阪神甲子園球場にほど近く、試合の歓声が聞こえてきた。阪神タイガースが勝ったときの盛り上がりは実にすばらしい。試合のある日は子供心にわくわくしたことを昨日のように覚えてい



関西から世界へ発信続ける

安藤忠雄さんが設計した兵庫県立美術館(写真上。下の写真の奥)。隣の公園に、兵庫県の木であるクスノキ約250本を植え、復興のシンボルとした



また、震災復興事業で手がけた兵庫県立美術館は、阪神岩屋駅が最寄り駅。美術館の隣に公園を造り、兵庫県の木であるクスノキを約250本植えた。緑と文化の力を借りた復興を目指した。

「神戸のまちづくりへの提言があれば。かつての美しさを取り戻しつつあるが、それだけでは足りない。多くの人が訪れるには、新たな魅力が必要だ。北野の異人館や、元町の居留地

神戸市 久元 喜造 市長



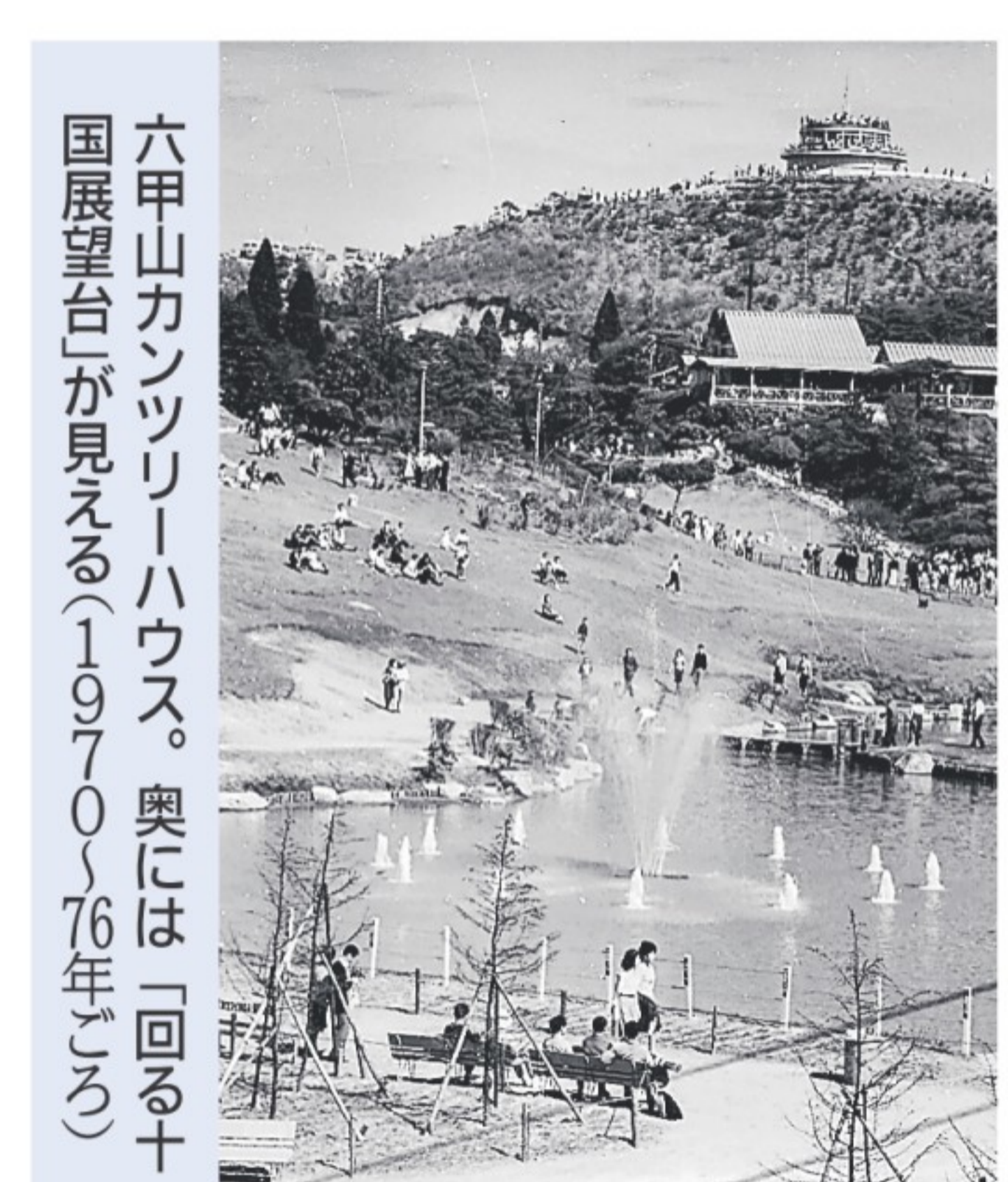
「阪神電鉄と神戸市との関わりについて。阪神電鉄が開通した時、神戸市内には神戸から深江まで14の駅が開設された。集落ごとに駅がつけられたため駅間の距離が短く、その名残からか今も乗っていると乗客の皆さんが電車を普段使いされていることが伝わってくる。駅とまちが一体化し、生活に密着している雰囲気は阪神電車ならではの。阪神大水害、震災、そして阪神・淡路大震災という苦難に直面され、神戸市も一緒になって復旧、復興に当たってそれを乗り越え、非常に深いつながりを持って

六甲山上の芸術祭に協賛



阪神本線の連続立体交差事業は、2019年に鉄道の高架化が完了、側道の整備・改良も進んでいる。阪神青木駅前

駅前駐輪場整備し魅力向上



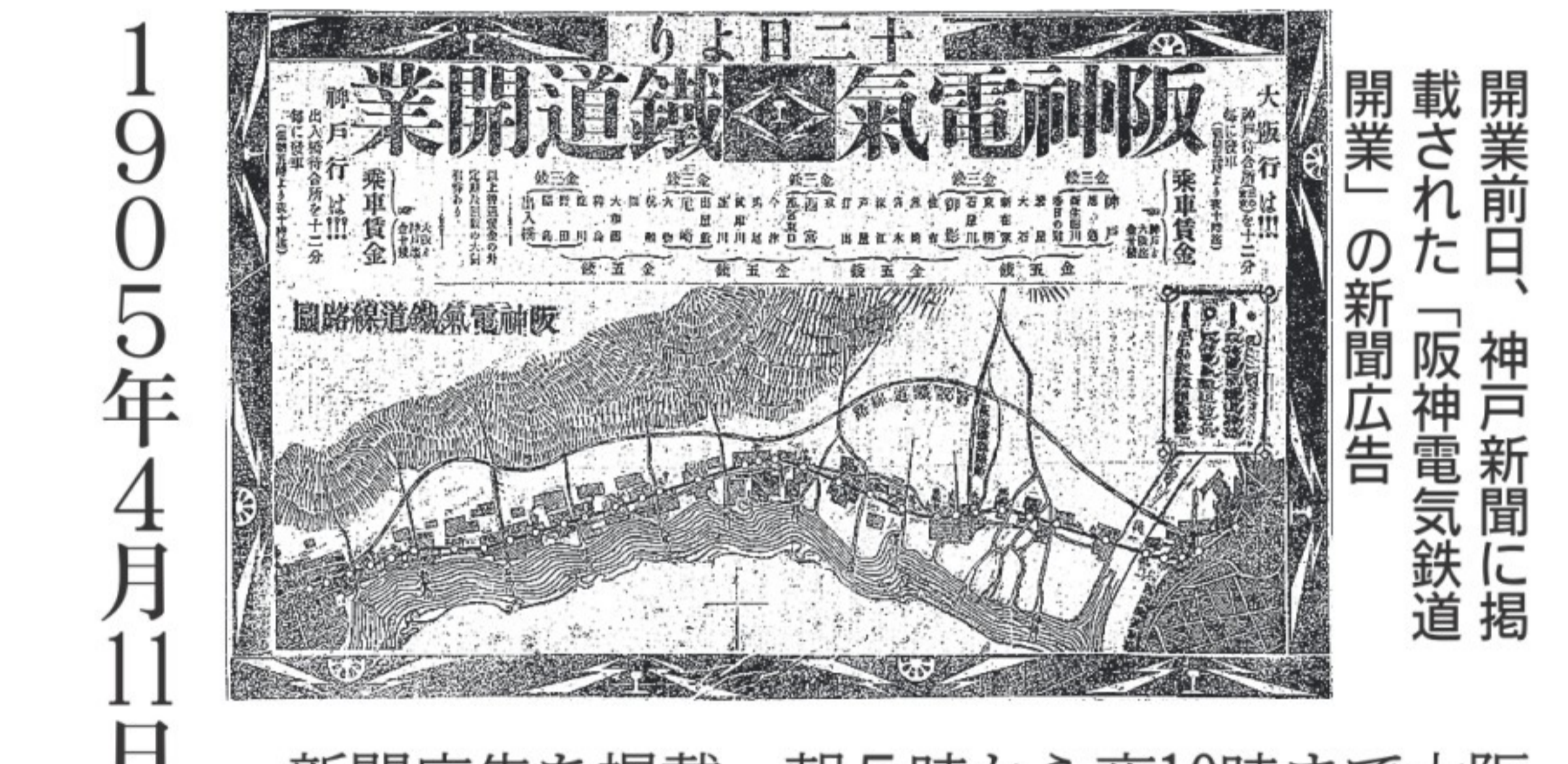
六甲山上を舞台に開催する現代アートの芸術祭「神戸六甲ミーツ・アート2024 beyond」より、周逸喬「赤と緑の行き違い」

「ツ・アート」は今や関西を代表する芸術祭に発展し、神戸市も協賛している。沿線には日本酒の酒蔵が集積する。24年12月には、日本の「伝統的建造物」がユネスコ無形文化遺産に登録され、インバウンドからの注目も高まっている。

「まちづくりで取り組んでいきたいこと。1997年以降、住吉駅東側から芦屋市境までの区間で、鉄道を連続的に高架化し、

道路と鉄道の立体交差化を図る事業を進めてきた。2019年で高架化が完了し、本年度には側道の整備も踏切る。これに伴い11カ所の踏切除根、33路線の交差道路、3路線の側道が整備・改良され、安全・安心でにぎわいのあるまちづくりが実現する。

阪神電鉄ダイアリー Hanshin



1905年4月11日 開業前日

開業前日、神戸新聞に掲載された「阪神電気鉄道開業」の新聞広告

新聞広告を掲載。朝5時から夜10時まで大阪・神戸を12分ごとに発車し、定期および回数の大割引券ありとも。乗り心地よい車両で34もの駅を結んだ「あたたかさ」「ほんまもん」「先進性」は開業時から。阪神の成功で、都市間電気鉄道は全国に広がりました。

1905~

東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル

阪神電気鉄道は、甲子園開発の一環として、1930年、武庫川畔の景勝地であった鳴尾村小曾根に鉄筋コンクリート4階建て・延べ面積2,000坪の「甲子園ホテル」(1944年)を開業。設計者は帝国ホテルをつつたフランク・ロイド・ライト門下の連藤新。群を抜く広大な敷地に端麗な建築美と鬱蒼たる庭園美を兼ね備えた華やかなホテルは、阪神間の社交クラブとして存在し、当時「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称されました。

“ほんまもん”の眺望・夜景を楽しめた六甲山上のホテル

一方、避暑地として注目されていた六甲山では、1934年、天狗岩付近に「六甲オリエンタルホテル」(2007年)を建設、更に、1936年には旅館「雲荘」(1998年)を開業しました。昭和~平成にかけて、多くの宿泊者が眼下に広がる素晴らしい眺望・夜景を楽しんだことでしょう。六甲オリエンタルホテルの遺構である「風の教会」(設計は安藤忠雄氏)は、現代アートの芸術祭「神戸六甲ミーツ・アート」の会場としても活用されています。

私たちが届けてきた「ほんまもん」とは

THE RITZ-CARLTON

「たいせつ」がギュッと。 Hanshin Group

阪神電車が1905年に開業して120年。お客さまの「たいせつ」に向き合い「阪神らしさ」を育んできました。つながりが生む「あたたかさ」。プロフェッショナルが生み出す「ほんまもん」。共感から生まれる「先進性」。お客さまの「たいせつ」がギュッと。つまったモノやコトを生み出しお届けしていく、阪神グループの物語がここにあります。

~2025 to the future

いつの時代もお客さまに最高のおもてなしを

1992年に着手した「阪神グループ挙げての二十一世紀への新しい挑戦」と位置付けた西梅田開発事業。グローバルなビジネスの拠点にふさわしいラグジュアリーホテルとして、1997年、ザ・リッツ・カールトンの日本第一号となる「ザ・リッツ・カールトン大阪」をハービスOSAKA内に開業しました。同ホテルならではのきめ細かいサービスは極めて高い評価をいただいています。お客さまに最高のおもてなしを提供したいとの想いは、いつの時代も不変です。

Hankyu Hanshin Toho Group

「たいせつ」がギュッと。 Hanshin Group

阪神電車が1905年に開業して120年。お客さまの「たいせつ」に向き合い「阪神らしさ」を育んできました。つながりが生む「あたたかさ」。プロフェッショナルが生み出す「ほんまもん」。共感から生まれる「先進性」。お客さまの「たいせつ」がギュッと。つまったモノやコトを生み出しお届けしていく、阪神グループの物語がここにあります。

阪神「たいせつ」ストーリー 開業120周年 特設サイト